



# 親鸞の生涯

388

法に問う 1

最も信頼し愛した一子善鸞に背かれ、また、二十年にも及ぶ関東教化のなかで得た念仏の同行集団からも疑われ抗議を受けた親鸞は、当初それでもあの善鸞がという思いから、直にはその現実を受け入れられなかった。

追い詰められたかたちで親鸞がいわゆる善鸞に「義絶状」(絶縁通告)を出し、且つ、お同行たちにもその写しを送ったのは康元元年五月二十九日(聖人八十四歳)であった。

しかしこれで一件落着とはいかない。というよりも、ここから年老いた親鸞のあらたな苦悩と求道が始まったというべきであった。

人からも自らも、その人格を全面否定された親鸞は、その懊悩のなかで改めて仏・祖師の前にひれ伏し、そのことばとおしえを聞く以外にはなかった。

先輩たちの著書を写し味わいなおし(『一念多念証文』『唯信鈔文意』)また法然上人の語録『西方指南鈔』を編集し、そのうえ何日も何日も、所々方々を遍歴して、それぞれの肖像画の上下に書かれていた「銘文」を改めて聞き直した。その記録『尊号真像銘文』(そんなうしんぞうめいもん)である。

「ご本願」に誓われている救いの対象は煩惱具足の衆生、すなわちほかならぬこの私であったのだ。

往生浄土の業因(タネ)は、聖人たちが自分の力で行う修行ではなく(自力修善)、如来の大願業力(罪悪深重の悪人をこそ救いたいという願いとそのはたらき)「横超他力」であること。

だから、そのご本願の真実が聞こえた一瞬に直ちに往生は決定する。死んでから行くお浄土ではなく、現生正定聚(げんしょうしようじょうじゅうじゅ)といつて、如来さまのお呼び声(南無阿弥陀仏)が聞こえた一瞬に、この親鸞、往生決定したなかまになるのです。

小賢しい人間の知恵や、我が身かかって私たちの姑息な分別(はからい)は投げ捨てて、如来様の呼び声(念仏)と本願のはたらき(法爾自然)(ほうにじねん)に随順帰命するばかり。

若い時分から何度も学んで来た教義であり法文であったが、いまのこの打ちひしがれた身の親鸞には骨身に浸透してくる「おしえ」であった。親鸞は何度か感涙に咽んだことでした。

最晩年の親鸞が、苦難のなかからくみ取ったこの法のおしえを、わたしは、同じ年代年齢のころに、いただきなおしたいと念じているのである。

## 葬儀

十一月二十八日 神戸市  
宮島 一甫 さま  
九十二歳

十二月 七日 坪口  
坂本 寿子 さま  
九十八歳

## 遠慶宿縁 頌春

平成二十二年

住職 西池 匡紹  
前住職 西池 哲俊  
坊守 西池 美幸  
後継住職 西池 深音  
西池 希里(三) 西池 入海(六)

### 責任役員

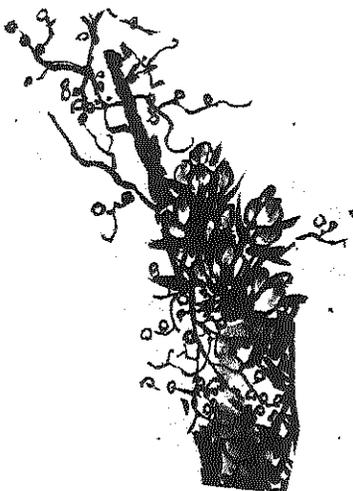
宮嶋 千秋  
兼井 通夫 大石 正和  
玉井 克弥 中島 武志  
齋藤 保 湯口 博文

### 仏社役員

会長 坂本 貢  
副会長 足立 幸夫 山田 好美  
会計 坂本 光隆  
顧問 齋藤 節夫 湯口 博文  
事務局 岡野 隆 湯口 富雄  
山田 博文 中嶋 英樹  
永井 正人

### 仏婦役員

会長 稲葉 節子  
副会長 関川 鈴子 立脇やよい  
岡野 田鶴子 田中千加子  
永井 春代  
会計 永井 春代  
事務局 藤川 孝恵 齋藤 昌子  
法輪会 代表 永井 孝一 一郎  
世話人 坂本 光隆 大石 正代  
南 加寿子 岩上加代子



## 一月 睦月のこよみ

一日 修正会  
二・三日 初参り  
四日 但東初参り  
七日 朗読ボランティアあすなる  
八日 坪口報恩講  
九日 坪口報恩講  
十日 坪口報恩講・坪口女中講  
十一日 和屋・出石報恩講  
十四日 出石報恩講  
十五日 出石報恩講  
十六日 代議員員会  
十七日 榎見女中講  
十八日 榎見報恩講  
十九日 榎見報恩講  
二十日 宮嶋一恵さま忌明法事  
二十三日 仏社三役会  
二十四日 濱 薫さま一周忌法事  
二十六日 出石組同朋講座  
二十七日 みのりを聞く会  
二十八日 仏社役員会  
二十九日 あすなる(編集)  
三十日 坂本 寿子さま忌明法事



### 成人式おめでとう

出石町上村189  
 出石町小人79-3  
 出石町上村798  
 但東町市場  
 出石町上村129-1  
 但東町小谷227-1  
 但東町小谷88

輔 千 貴 巳 二 真 大  
 繪 則 和 葉 彦 樹

本 古 横 山 友 本 本 本  
 田 古 横 山 友 本 本 本  
 宮 宮 森 坂 宮 宮 宮

### 慶



「遠く宿縁を慶ぶ」

「ことしの漢字」にわたしは「慶」の字を選びました。

先ず、この漢字を、中国の思想のうえから伺ってみました。慎許の『説文解字』（最もオーソドックスな辞書）では「行キテ人ヲ賀スルナリ」とあります。「人の幸せをお慶びする。壽ぐ。」と云うところでしよう。

次に最近亡くなった白河 静先生の金文からの漢字成立解釈『解字』によると「占いに用いる神羊のうえに勝訴のしるしを得たよるこびの心をしるした」とこの文字の成り立ちを説明し「たまものを慶ぶ」とその意味を解しておられます。

いずれも深く大きな恩恵を有り難く慶ぶと言ふことでしょうか。

親鸞さまは、その著書『顕浄土真実教行証文類』（浄土真宗の根本聖典。本典と言ふ）六巻のその「総序」（全体のまとめ）に、如来さまの本願のお呼び声を聞いた（信心の）よろこびを

タマタマ行信ヲ獲バ、遠ク宿縁ヲ慶ブと述べておられます。

わたしのような罪業深重な愚かなものが、とても得ることのできない広大無辺な如来のおめぐみに出遇えたことは、並々ではない不可思議な縁のたまものと、よろこばせていただきます。

（それが念仏者の生きざまではないでしょうか）

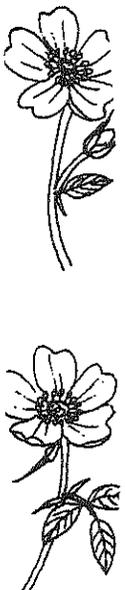
インドのお釈迦さまも「縁起の法」をさとして仏様になられました。全ての物事は量り知ることのできない無量無辺の縁（はたらきかけ）によって成り立っているもの。自分ひとりの力や思いで生きていて考えることの誤りに気づきなさいと教えられました。

「縁起」と言うのは「衆縁生起」と云うこと。このお釈迦さまの教えにもかわらず、わたしたちは、依然として「自己中心」「自分本位」にしか考えません。

今のわたしにとって都合のよいものだけを勝手に選り出して、遠い血筋のご祖先さまのご縁で、大変身勝手な祖先崇拜をしたり。狭いわたしの独善的な知識で判断して、これが社会の真実・歴史の真理などといったて、結果、対立や戦争まで起こしてしまっています。

親鸞さまは、「はからうな」と戒めます。「おのずから、しからしめる」ご縁を慶べと教えられます。

南無阿彌陀仏のお呼び声は、煩惱具足のわたしに、ジネン（自然のご縁）はたらしきを知らせるための呼び声と聞きましようとするめられているように思います。



### 勝林寺の年々始

どこの家庭でも、毎年年末年始は慌ただしい。寺にはそのうえに寺独特の行事が幅廣する。しかし、それだけに寺の生活の有り難さ「もったいなさ」を味あわされる季節でもある。

この季節の始まりは、例年十一月二十一日、二日に勤まる寺の（宗祖親鸞聖人の）『報恩講』である。

年中最大の法要とあって、事前の本堂内外の掃除や仏具のお磨き・お莊嚴はもちろん、当日の「おとき」の準備、参拝者の送迎バス等、総代・仏壯・仏婦・法輪会など、あげてお勤めをする。

その寺での『報恩講』が終るとすぐ、年末年始にかけて家庭の『報恩講』が勤まる。但東町の奥の部落から始めて部落毎に順次ご門徒の各家庭で「お正信偈」で報恩講を勤める主だった部落では、その部落の門徒相寄って「惣講」（総講とも）を勤めるところもある。但東・出石・八鹿・豊岡とつとめ終るのは来年二月末になる。

その間、寺では十二月二十七日ごろ「お鏡餅」の餅つきがある。主に仏壯の会員で鏡餅をつく。

年末、除夜の日には「除夜の鐘つき」に、ご門徒の方ばかりでなく出石の町の有縁の人びとが参加して百八つの鐘をつく。この時には主に仏壯が世話をし、お雑煮・甘酒などの接待もして下さる。本堂では、除夜会（除夜会）・続いて「修正会」（しゅじやう）（元旦会）のおつとめが勤まり、全員それに参詣して新年のあいさつを交わして別れることになる。

このように年末年始、行事幅廣するが、すべて総代会・仏壯仏婦と、ご門徒総出の協力で行される。

昔からの伝統とはいえ、いまさらながらこの寺の有り難さ「もったいなさ」を感じさせられる。

もう一つ。「年忌法要の繰り出し」ということがある。

この寺では、一周忌・三回忌・七回忌・十三回忌・十七回忌・二十五回忌・三十三回忌・五十回忌・百回忌にあたる方の忌日を、「過去帳」から「繰り出し表」に転記して、「お正月参り」（一月一・二・三・四日）に家庭へ手渡すことになっている。平成二十二年の百回忌は明治四十四年。五十回忌は前任職がお葬式を勤めた方々。お一人お一人のお姿やご恩を偲びながら繰り出し作業をするのも年末の厳肅なひとつの仕事である。

### 虎とら

寅歳にちなんだコトワザ

虎・狼より人の口 恐ろしい

虎の威を借る羊

羊が虎に食われそうになったとき羊が言った。「わたしは神様の使い。嘘と思うなら私についておいで。生き物みんな平服するから。ほんとうに生き物みんな恐れおののき平服した。親の七光で議員バッジをつけている奴

虎を描いて猫に類す

虎を描いたつもりだったが猫にしか見えない。ひとかど名士ぶってるつまらん奴

虎穴にいらずんば 虎児を獲ず

本来虎は子供は少ない。それだけに大切に育てる。その虎の子を捕るのは並大抵のことではない。危険を恐れていては大切なものは手に入らぬ。

前門の虎 後門の狼

一難去って また一難。

虎の尾を踏むがごとし 危ないことこのうえなし。

虎に翼 北朝鮮に武器を贈るようなもの

虎の子わたし 苦しい家計のやりくり算段。（虎の子は高額貨幣のこと）

虎は死して革をとどめ 人は死して名を残す 死んで悪名を残すものもいます

虎を野に放つがごとし 危険人物を社会に送り出すこと。釈放。

### 虎の巻

『六韜三略』。中国の古い戦術書の内の「虎」という一巻。学芸の奥義書。勉強の参考書。アンチョコ。